



**八千代市郷土歴史研究会**  
 会長 村田一男  
 事務局 八千代市勝田台3-24-10 牧野方

**7月12-13日(土・日)**  
**佐原の大祭見学会**

**お知らせ**

**8月10日(日)午前9時半より**  
**例会**  
 於：八千代市郷土博物館  
 ・高津新田調査まとめ

同日同館で午後1時半から、山折哲雄先生の「暮らしの中の宗教」企画展講演会があります。午前の例会後、聴講しましょう。

**9月7日(日)午前9時半より**  
**役員会**  
 於：八千代市郷土博物館  
 ・「史談八千代」28号企画  
 ・原稿〆切

**9月14日(日)午後1時より**  
**例会**  
 於：八千代市郷土博物館  
 ・文化祭展示の企画  
 ・「史談八千代」編集)

**10月13日(月)午後1時より**  
**例会**  
 於：**勝田台七丁目公会堂**  
 ・文化祭展示の制作  
 ・「史談八千代」最終校正

**10月19日(日)バス見学会**  
 集合：午前8時 勝田台北口  
 行先：茨城県古河市 歴史博物館・文学館・篆刻美術館・古河城址など

文化祭準備作業日程は9月例会時にお知らせします。

市民文化祭参加  
**「郷土史展」**

**11月22日(土)**  
 午後1時～5時  
**23日(日)**  
 午前9時～午後4時

高津新田研究 その他  
**勝田台文化プラザ2階 展示室**

千葉県郷土史研究連絡協議会  
**14年度奨励賞を**  
**本会が受賞！**

6月29日(日)午後1時から千葉神社講堂において、千葉県郷土史連絡協議会15年度総会がおこなわれ、その席で、本会が奨励賞を受賞しました。

平成8年度同協議会の輿石賞受賞に続き、2回目の受賞です。当会から村田会長・小菅・藤本早苗・藤本涼輔・村上・関和・わらびが出席し、共に受賞を祝いました。

総会后、木村礎先生の記念講演「千葉県(下総部分)での私の地方史研究」をお聞きしました。



**4月20日(日)**  
**定期総会報告**  
 午後1時  
 八千代市郷土博物館にて

15年度の定期総会は、会員数52名のところ、出席者27名、委任状(メール、電話を含め)提出12名にて、滞りなく議案をご承認いただき、増員された役員とともに、新年度の活動のスタートを切ることができました。

本年度の事業予定は、次のとおりです。

「高津新田」研究調査のまとめ

「三山の七年祭」の調査(祭りまでの地区の動き)

市内社寺奉納額句碑等悉皆調査(高津新田諏訪神社歌額を含む)

「史談八千代」第28号の発刊などです。



総会后、高津新田諏訪神社にあった歌額の実見と、赤外線照射写真による解読の検討を行いました。この和歌額は、明治36年7月に「松の舎」という方が病の癒えたお礼にと病床で詠んだ60首を和歌額にして奉納したものです。和歌は地名を織り込んであり、八千代、習志野、佐倉、成田、千葉と広範囲に及び、当時の人々のものの見方、考え方が表現されていて、一読に値するでしょう。

3月22 23日  
八千代歴研 30周年記念事業  
東・西金砂神社大祭  
見学会の報告

わらび ゆみ

金砂の大祭礼は72年に一度、茨城県の西金砂神社と東金砂神社の二社が、その期間をややずらして別々に、水木浜までの磯出の行列と大田楽を行う珍しい祭りです。

一年前の総会で「一生に一度、感動の東・西金砂神社大祭礼に行こう!」という会長の呼びかけに、胸をおどらせて迎えた大祭礼。

参加者は23名。晴れ女(男?)の威力で、常陸路は春らしいよい天候の恵まれ、1泊二日の日程で感動の連続の大祭礼をたっぷり味わってきました。



22日朝7時前に勝田台をバスで出発して、水府村の天下野宿に10時半過ぎに到着し、山頂の西金砂神社めがけて山登り。

山道の途中から、12時ごろより神社から下りてくる神輿を迎え、小神輿から本神輿に御魂を遷す祭典を見てから、竜神橋入り口まで歩き、そこからまたバスで山道を登って、東金砂神社を見学しました。



23日は、横川温泉中野屋を6時に出発し、中染祭場の駐車場にバスを止めて朝食。

人でいっぱいの祭区内でひたすら待って、8時からの祭典と田楽を見ました。(人の頭しか見えなかったという方もおられた?)



路上で壮麗な大行列を見送ってから、バスで竜神大つり橋のレストランに移動し昼食。

午後は城郭跡でもある西金砂神社へ行き、険しい山上からのすばらしい展望を楽しみました。

帰路は、再びバスで水戸の造り酒屋・別春館を見学して、大洗から潮来経由で予定通り7時50分ごろ勝田台に着きました。

会長・事務局長・ツアーリストの方々での周到な下見と、会員の方が入手してくださった『郷土ひたち』53号など貴重な参考資料などが役立って、絶妙のタイミングのスケジュールでのたいへん意義ある見学会になりました。準備に尽力いただいた皆様、ありがとうございます。

今回大行列の重なった3月25-28日を「祭りの二重奏」と茨城新聞は報じましたが、まさに競い合うような華麗さで、北常陸の町と村と浜とを魅了し続けました。

この大祭礼の感動のドキュメントと歴史的考察は、今秋発行の「史談八千代」28号に掲載の予定ですので、そちらもお楽しみに。

5月18日(日)  
例会報告

八千代市郷土博物館にて午後1時より19名の参加でした。

高津新田調査について情報交換などを行いました。

- 1.民俗行事・人生儀礼などについて、旧家からの聞き取り調査の計画
- 2.高津新田諏訪神社奉納歌額の解読調査の報告
- 3.高津新田「ムラの構成表」(屋号・本家分家関係・講など)の調査中間報告
- 4.地域の石造物調査・馬頭観音をテーマにムラの経済的背景など考察する
- 5.高津新田の子供たちはどこの寺子屋へ行っていたか...高津新田の教育と文化圏の模索...
- 6.長作公民館で長作在住の郷土史研究家K氏から伺ったお話の報告

三山七年祭の八千代市内ムラの準備過程の調査について

- 1.高津は役員から前回の記録を見せていただいた。今後の祭りまでのムラの動きを記録する。
- 2.大和田、萱田についても担当を決めて調査を行う。
- 3.調査研究のまとめは、祭りの終了後で、次年度の予定。

(事務局)

### 道標データの追加

2002年11月~03年6月分

3-01 馬頭観音道標・弘化4年  
「西をうわた かやた道」  
場所：四街道市鹿渡御別当(善光寺より鹿渡郷土の森駐車場入口三叉路) (天野)

チ-16 庚申塔道標・明治25年  
「此方おわだ 此方けみ川道」  
「此方花島柏井 井みち」  
(指差しに「大和田」「花見川」)  
場所：千葉市花見川区天戸町1203-2の三叉路 (わらび)

資料紹介

稲垣家もう一枚の家相図  
村田 一男

昨年12月例会では稲垣家を訪れ、家屋調査をさせていただいた。その際ありがたいご好意で「家相図」を管見することができた。家相図は、稲垣家が元小字西野(現在の習志野市東習志野の工業団地のあたり)から明治30年代後半に現在地へ移転移築する際に作成したものであった。現状の家屋を家相図の平面図と比較すると、増改築されてはいるが移築時の間取りがよくわかる貴重な図であった。会員一同は初めて見る絵図と絵図からの読み取りに深い史的感慨を持った。

ところが勤務先の博物館の展示図録を調べていたら、稲垣家のもう一枚の家相図が当館にあることがわかった。ずっと以前に稲垣家から博物館に寄贈されたもので、平成8年度第3回企画展「絵図に見る村ムラ」の「家相図に見る人々」の部分で染谷源右衛門家の家相図(大正3年)とともに展示されていたのだ。

稲垣家の家相図は、縦48cm、横80cm、方位は左側が南で、東側の東南角に近いところに表門があり、母屋は東西方向で敷地の中ほどに位置し、周りに付属舎が配置されている。母屋の土間にはカマドが4基、南端には「玄関」の間取りが認められる。北側の端には、天保十一年(1840)、東部昇龍(落款二つ)と記されている。なお、包み紙には「家相絵図面入り 五行道人選」と記されている。

明治30年代後半の家相図では玄関はなく、現況でも玄関間取りが見られなかったが、その後、牧野さんの再調査により玄関の造作遺構が認められている。このことから、稲垣家は西野に建立されていたときは玄関を備えていて、移転時には玄関を復元しなかったと思われる。近代明治も後半となり最早ステータス

として玄関を構える必要がなかったのであろう。

さて、秋の市民文化祭発表では、二つの家相図と現況図・復元図を並べて、稲垣家をよみがえらせたいと願っている。

6月22日(日)  
例会報告

八千代市郷土博物館にて午後1時より18名の参加でした。

・「高津新田研究」調査の経過の報告

ムラの構成表・古文書から見た移り変わり・民俗に関する聞き取り調査と市川の地蔵さまの講について

・三山の七年祭・時平神社(大和田・萱田町地区)の準備状況の把握調査の経過

・市教育委員会著作の記録映画「三山の七年祭り」の鑑賞

・連絡事項

千葉県郷土史連絡協議会奨励賞受賞式の件・佐原大祭見学会参加者の確認

(事務局)

その他の研究活動報告  
高津新田調査に関連して

5月14日午後、牧野・小菅・真砂・畠山で長作公民館に行き、長作在住の河野達二氏から色々とお話を伺った。

河野氏によれば、「高津新田は長作等から入り込み、成立していったのではないか」とのこと。また「長作には今も当主(元校長)が町会長を勤める大木家がある」とのことであった。

(畠山)

5月31日午後、酒井・成瀬・わらびで、I(カンエモン)家で旧家のご婦人方から、昔の暮らしや人生儀礼・講などのお話を伺った。

(わらび)

七年祭の地区の動きについて、牧野・板谷・わらびが調査中

高津新田民俗調査から  
「市川の地蔵さま」を探して  
わらび ゆみ

5月に高津新田の旧家のご婦人方から人生儀礼や講などのお話を伺う中で、「市川の地蔵さまの講があった」ということをお聞きした。

「世話人と当番が国府台からネモトデラへお参りにいった。桜の咲くころで、近郷近在からたくさん人が来ていて、志津からきた女学校の旧友に会ったりもした。この地蔵さまは、四角い箱を背負ってムラにもやってくる、子供たちが隣村まで送っていった。今もその寺があるかどうかはわからない。」

さっそく、市川在住の民俗研究家の萩原法子先生に、そのお寺の場所や習俗などについてお聞きし、市川の土地勘に強い増田さんに同行をお願いして、6月21日の暑い日、「市川の地蔵さま」を探しに行った。

場所は国府台5丁目、国府台駅からはかなり距離がある。文化5年銘の「明王山根本寺/豫州佛木寺寫」の石塔が境内入り口にあるほかは、意外に近代的なたたずまいであった。



法事の合間を縫ってお会い下さったご住職のお話によれば、この寺院は真言宗豊山派に属し、以前は国府台駅のすぐ北側にあったが、昭和46年この地に移転し、翌年落慶したとのこと。

「安産子安の時間の地蔵さま」として、都合のよい時間にお産が無事できることがご利益で、毎年4月12日~15日の大祭には、地蔵講の婦人たちが各地から今でも大勢集まるそうだ。

午後は、萩原先生のお宅にお寄りしてから、資料を求めて市川歴史博物館を訪ねた。

博物館の入り口に、昭和3年松井天山が描いた市川市街の鳥瞰図を拡大したパネルがあり、根本（ねもと）の地、すなわち真間山の西側の裾野の国府神社の隣に「根本寺」が描かれている。

学芸員の湯浅治久先生に、根本寺の由来などをお尋ねすると、真間山弘法寺に関する史料を探してくださった。

そのご教授によれば、弘法寺は1275年天台宗から日蓮宗に改宗、15世紀には「真間山根本寺」宛ての安堵状などの文書にでてくる「根本寺」があったらしいが、一方弘法寺が下総の根本道場であることから文書中の「根本寺」の名は弘法寺の別名とも思われるようだ。

この史料中の「根本寺」と、応永4年(1397)の創建を伝え、古くは市川国分寺の末寺であった「地蔵さまの根本寺」とに関連があるかは不明とのこと。中世に遡ると、謎は深いらしい。

帰路、国分寺から歩いて、根本にあったという旧地を訪ねてみた。コンクリートの階段を登って、国府神社から、根本の街を望んだが、高津新田の女性たちが安産の祈りを込めてお参りしたという根本寺の跡は、三十年位前にマンションになっていた。

さらにここ数年、国府台地上の大学校舎や、真間山台地上のマンション建設ですっかり景観が変わってしまっている。

古墳や城跡が眠る江戸川辺りの緑濃い台地が、変貌しつつあることに気づかされた2003年の夏の一日でもあった。



### 平野仁蔵さんの 74年間の日記帳の展示 板谷 繁

本会最長老会員・平野仁蔵さん(96才)の昭和3年から平成14年までの74年に及ぶ日記帳(全73冊)が6月1日(日)公開展示されました。

「女性の日記から学ぶ会」(島利栄子代表)が創立7周年の行事として、八千代市女性研修センターで行われたものです。

また平野さんと島代表との対談と日記の朗読などもあり、会場からも多くの会員が参加し、貴重な日記に感動を覚えました。

日記は生きた歴史の宝庫であり社会の遺産そのものだとおもいます。

明治に生まれ、激動の昭和を生きながら、社会の変遷・私生活の変遷を日記というかたちで綴っております。

1月1日に書いた日記をピックアップしてあるコーナーもあり、日記のみならず愛用品の本・ヘルメット・鍋・新聞の切り抜き・古い貨幣なども展示されておりました。よくも保存しておいたものだと感心いたしました。

平野さんは文学青年で、文語体から国語体の文章をあれだけ表現できるのはたいしたものだと思います。



= 平野さんの略歴 =

- ・明治40年 栃木県芳賀郡小貝村(現市貝町)に生まれる
- ・大正13年(17歳) 文学好きの長兄の影響で日記をつけ始める
- ・昭和3年(21歳) 現在残る

一冊目の日記

- ・昭和20年(38歳)~昭和21年 日記帳が買えないで苦勞
- ・昭和62年(80歳) 八千代台に移住
- ・平成元年 当会に入会
- ・平成11年 女性の日記から学ぶ会に入会
- ・平成14年 日記73冊目となる

平野さんは「日記から学ぶ会」で明治・大正時代の読み解き、文語体やくずし字を読める助っ人として参加したのがご縁となり、平野さんご自身の日記を紹介することになったそうですが、公開するにあたり「日記の会」にお書きになった「私と日記」の一部を紹介させていただきます。

『日記は其人の行動、心の軌跡である。従って他人には見せたくないのは当然だし見られたら困る所もある。それ故に今迄自分の日記を人目に晒す事など夢にも考えたことはなかった。』

それがなんの巡りあわせか「日記の会」との縁が出来て、不測の夢は計らずも現実となってしまったのである。これには困惑した。自分の日記を人前に広げられることは裸身を見せるも同然で、容易に頷けるものではない。

けれども日記自体は、忘れられていた暗闇の奥から再び明るい日の目を見ることが出来る様になる訳で、日記の表と裏には困惑と喜びが同居しているのに気づいたのである。』

#### 編集後記

千葉県郷土史研から、本会の活動を評価いただき、うれしい受賞の紙面となりました。懇親会で事務局長秋葉様から「熱き血を賭けて歩みしこの道を共に支えし君に幸あれ」の歌をいただき感激!

By.ゆみ  
sawarabi-y@nifty.com